

## 『漂う匂いと記憶』について

1J04E185-3 松本 裕介

今回、私が選んだテーマは「漂う匂いと記憶」というものであった…が、約三ヶ月間この講義を受講し、様々な受講者の方々の動機文や対話文を読ませていただくにつれ、改めて、本当にこのテーマでよかったのだろうかと思ってしまった。というのも、皆さんが自分の趣味だったり、将来だったり、日頃気になっていることだったりをテーマに選んでいけるのに対し、私は本当に「何となく」気になっているという程度のことをテーマに選んでしまったからである。もっと文章にするべきテーマがあったのではないか…。しかし、この講義で「自分の興味があることについて書く」というお題をいただいたときに、真っ先に思い浮かんだのがこの「匂いと記憶の関係」であったことも事実であり、やはり潜在的に気になっていたことなのであろう。そう考え、自分の思うままに書いていこうと思う。

まず、このテーマを選んだ“動機”であるが、それは、「ふと、昔懐かしい匂いを嗅いだ瞬間、過去にその匂いを嗅いだときの記憶がわーっと蘇ってくる現象ってあるよね」というものである。なにやら書いている私も何が云いたいのかわからないくらいわかりにくい文章であるが、皆さんに伝わるだろうか。一つ具体例を出すと、私が小学生の頃、毎日のように遊んでいた公園があった。そこにはキンモクセイの木があり、春になって暖かくなると甘い香が公園中に広がって、その匂いで改めて春になったことを感じていた。しかし、小学校を卒業するのと同時にその公園には足を運ばなくなっていった。そして時は流れ、私は大学生になった。ある春の日、都内某所を歩いていると、ふっと甘い香が鼻をかすめた。その瞬間、小学生の頃毎日遊んでいた公園の記憶がバァーっと走馬灯のように蘇ってきた。当時の記憶が蘇って初めて、その香がキンモクセイであることがわかった。というようなことである。このエピソードは、実は私が今思いついた作り話であるが、実際似たような体験をしたことがある。だったら自分の体験談を書けばいいじゃないかと思われてしまうかもしれないが、悲しいかな、私のエピソードには具体的なことがなにもないのである。何の匂いなのか、また、いつごろ嗅いだにおいなのかまったくわからない。わからないというより、覚えていないといったほうが正しいかもしれない。しかし、そんな不確かな記憶の中の不確かな体験でもなお、そういった体験をしたという事実があり、また興味を抱いているのである。

次に、“対話”に話を進めていきたいと思う。“動機”に関しては以上のような理由であるが、ではそもそも私以外の人もこのような体験をしているのだろうか。私の独りよがりな体験なのではないか。それを確かめるためにも、第三者との対話をする価値はあると考えた。

対話の相手は、大学の友人 A であった。受講者の皆さんの対話文を読むと、そのテーマに深く関係している人だったり、何か良い助言を与えてくれるであろう人を対話相手に選

んでいるように見受けられたが、私の場合、特に私のテーマに興味を持っていないような人であっても、こういった体験をしているのかどうかを知りたかったので、あえて対話相手を選ぶようなことはせず、思ったことを率直に話してくれるであろう友人を選んだ。対話をすることで確実なものにしたかったことは、私以外の人も同じような体験をしたことがあるのかどうか、あるとしたら、それはどんな匂いでどんなときに嗅いだものなのか、ということであった。実際に行った対話をすべて書くと非常に長くなってしまうため、対話の結論だけまとめると、その友人 A も私と同様にそういった体験をしたことがあるとのことであった。しかし、具体的なことに関しては覚えていないようであった。また匂いに関しては、私自身当初、強い匂いや良い匂いのほうがより記憶に残りやすいのではないかと考えていたが、対話を進めていくにつれ、そうではなく、より強烈な記憶や思い出と結びついた匂いのほうが、後々蘇りやすいのではないかという結論に落ち着いた。もちろん何が正しいのかなどということはまったくわからないし、より科学的に解き明かすとなると、脳と身体の仕組みまで調べていかなければならなくなる。しかし、ここではより感覚的なものを大切にしていきたいと思う。というのも、こういった体験をする裏には、何かこうセンチメンタルな感情が関わっているように感じるからである。昔の記憶、それも心に刻まれた強烈な記憶をふとした瞬間に思い出すことは、否応なしにセンチメンタルな気持ちを引き連れてくる。そこに私の興味が隠れているのかもしれない。

以上のようなことを踏まえ、“結論”を導いていきたいと思う。まず今までの内容を整理する。過去に嗅いだことのある匂いをまた別のときに別の場所で嗅ぐと、ふっとその当時の記憶が蘇ることがある。さらに、その匂いというのは、強烈な記憶とともにインプットされたものである場合が多く、センチメンタルな感情を引き起こしやすい。以上のようなことがわかった。ここから、どのように結論を導いていこうかと考えたときに、ふっと疑問符が浮かんだ。そもそも、潜在的とはいえ、どうして私はこの「漂う匂いと記憶」が気になっていたのだろうか。匂いと記憶の関係が徐々に解き明かされてきた今、何となく理由がわかる。それは、“思い出”だったり“センチメンタル”だったりというものにそもそも興味がある、というか好だからだと思う。私は「漂う匂いと記憶」というテーマの裏に隠されていたモノを本能的に嗅ぎわけて、見つけてしまったのかもしれない。だからこんなにも興味がわくのである、きっと。

皆さんにとって、“思い出”とはどんな存在であるのだろうか。よく、「過去の話ばかりに囚われるのはよくない」とする風潮が世の中の中的にある。私も確かにそうだと思う。何だか後ろ向きな気がしてしまう。しかし、大袈裟であるかもしれないが、私は思い出があるから今の自分があると思う。どこかの本から拝借してきたような言葉であるが、本当にそう思う。なぜなら、私は思い出を作るために学校に行き、サークルをやり、旅行に行き、友達と遊んでいるようなふしがある。大学生活にとどまらず、過去を振り返ってみてもそうであったように思う。たぶん、自分にはこんなにも過去の“思い出”がある、という事実を身にまとうことで、自信がつくのかかもしれない。そのようにして、思い出を糧にして明

日からも生きていくことができるのだ。だから私は、匂いそのものというよりも、それが誘因となって思い起こされる“思い出”というものにこそ興味を引かれるのである。

話はそれてしまったが、自分の思いの至らなかった部分が、この講義を受講し、自分の言葉で、自分の好きなように書くことで初めて吐露されたような気がする。目指していたゴールとは違うところに辿り着いてしまったが、結果的には、自分の言葉で表現できたのではないかと思う。これからも、“考える”ということをやめずに、自分で考え、自分で表現することを続けていきたいと思った。

#### 【おわりに】

この講義を受講して、改めて自分の考えていることを文章にすることの難しさを感じた。どのような表現や言葉を使えばうまく文章としてまとめることができるのだろうか…。この講義でレポート課題が出されるたびに、自分の構文力や文章力と格闘してきた。この講義を通して、必ずしも文章がうまくなったとは言えないかもしれない。ただ、どうすればまとまりのある文章を書くことができるのかを考え、他の受講者の文章の書き方を参考にすることで、10月の時点の私とは違い、今の私は「潜在的な文章力」が上がっているのではないか。そんな気がする。

自問自答や葛藤が多かったが、やりきったことで、今までとは違う考え方ができる自分がいる。私にとってこの講義の役割は非常に大きかったと思う。